

# 戦後沖縄の〈洗骨〉習俗の変化

## —伝統的ジェンダーと女性たちの選択—

栗国恭子

### はじめに

人はそれぞれの時間を生きて、誰しも死に行く存在である。人の命の終りは、その存在の終りではなく、生きている者たちは、様々なく死〉に関わる様式（遺骸の処理法である葬法や儀礼、霊魂観・他界観及び墓制など）を通して死者と向き合うことになる。その向き合い方の在り様は、自然環境や社会空間位置などの要素と、生きる時代の〈死〉を認識する傾向と絡み合いながら変化し、その速度の強弱もふくめて立ち上がらせる。

本稿は、従来の研究において詳細に報告され、蓄積も多いテーマである沖縄における葬法の歴史・分布など多様な在り様のデータ整理分類や、霊魂観の変化を説明・解説することを目的にはしていない。今回は沖縄社会において近・現代を通して変化した〈死・葬法〉と社会的コンテクストに注目している。そして人の死後その肉体とそこに宿っているとされる霊魂の扱いに関する儀礼である葬送儀礼において、伝統的重要な役割を担った沖縄の女性たちに注目して、伝統的ジェンダー・ポリティクスの問題を取り上げる。

ジェンダー (gender) は、社会科学の中で「社会的文化的な性のあり様」を意味している。社会における〈男〉〈女〉の役割のあり様を通して、社会問題として浮上してくる問題・ポリティクスに焦点を当てていく。

## 1. 沖縄の葬法について — 複葬から火葬へ

### 1) 沖縄の葬法の特徴—洗骨と女性

この課題に触れる前に、沖縄及び日本の葬法についての基本的な点を確認しよう。

死者の葬法は、今日では一般的である火葬や、風葬、水葬、土葬、遺体遺棄などがある。

簡単に説明すれば土葬は、遺体を木棺や甕などに納めて土中に埋葬し、古くから日本全国的に行なわれた。火葬は遺体を火で焼き、短期間のうちに骨化する葬法で、かつて行われた〈野焼き〉などは東北地方の日本海側一部、北陸、西日本各地に散見している(た)。近世期以前の沖縄でも火葬の事例は確認できるが一般的ではない。

沖縄や奄美地方(近代以降は一次埋葬)において一般的な葬法は風葬である。遺体を入れた棺(時にはそのまま)を洞窟や崖下、墓の内部に置き、自然の風化で死者を骨化する。この段階が一次葬である。数年後に骨を取り出して清め、厨子(骨壺)に収納し弔う改葬(〈洗骨〉で表現されることも多い)する複葬の特徴を持つ文化空間とされて

---

あぐに きょうこ(沖縄国際大学非常勤講師・那覇市文化財調査専門委員会委員)

きた。この沖縄や奄美地方で行われた段階を経て死者を弔う葬法は、ある意味では死者の遺骨に対して複数回コンタクトする〈丁寧な〉という表現の理解も可能である。

洗骨を行う文化は、沖縄・奄美地方だけでなく世界でも確認できる。その中において沖縄・奄美文化で洗骨を行う役割が、沖縄では女性に限定されていることが、社会のジェンダー（性役割）の問題として重要なのである。

また、沖縄・奄美地方の小さな島嶼社会の自然環境からすれば、古い時代において燃料エネルギー（木材など）を必要とする火葬は、島の環境によっては人々に積極的に選択される葬法とも言い難い。

注目すべきは、改葬（洗骨）を伴う複葬文化を様式化していく過程で、女たちに改葬段階で〈洗骨〉する役割が付随し続けられていたことが、沖縄・奄美地方の特徴的な在り様である。この点において民俗信仰（宗教）を軸にした社会が有するジェンダー・ポリティクスの議論が立ち上がる。

## 2) 火葬の導入と普及について

火葬が日本の各地に普及したのは近代以降である。地域でのそのあり様は異なるが、一般的には明治時代は、土葬が主流であり、火葬率は約20～30%であった。昭和期に入ると火葬率は土葬を上回り、1980年代に入ると火葬率90%を越えている。

沖縄における火葬の取り入れは日本各地と同様に近代以降である<sup>1</sup>。近代以降に流入する県外出身者も多い都市部の那覇市では、大正時代に火葬場（天久）<sup>2</sup>、1915（大正4）年には葬儀社が設置されている<sup>3</sup>。1939（昭和14）年頃には、行政の後押しで火葬場設置の動きが本島（那覇市・西原村）を中心に確認できるが、その流れの勢いは戦中で中断されていく。

しかし火葬は、戦前の沖縄では一般にはさほど普及していない。戦後の火葬場設置（名護市、那覇市、大宜味村喜如嘉：1953年）を皮切りに本格的に広がり、1950年代から急速に普及した。そして1970年代の終わりには、火葬率は90%を超える程に広く定着して、離島にも次々に火葬場建設が計画されている。この従来の葬法から火葬への変化は、数値的には、1980年代以降から他府県と比較しても高い火葬率（95%前後）を示している<sup>4</sup>。現在では沖縄本島・主な離島に22の火葬場があり、火葬率も100%に近い状況である<sup>5</sup>。この100%に近い火葬率は、現在世界でも上位の火葬率である日本の国内においてさえトップクラスである。つまり沖縄は、世界でも上位の火葬地域であることを意味している。

## 2. 戦後沖縄の女たちの選択—ジェンダー—的平等へ—

日本の各地にみられる土葬から火葬化への変化は、戦後の地方からの人口都市集中（現在一部の都市では土葬禁止）、地方の社会生活変化（都市化・都市計画）、公衆衛生観念の浸透、火葬場（火葬エネルギーの確保）整備・葬儀社の定着などの社会環境変化要素で説明がなされる。この説明は、沖縄でも同様に従来の葬法から火葬へ変化した要因説明とし

て適切なものである。しかしそれだけの説明は、重要な要因を語ってはならず、沖縄ならではの事情を考慮に入れなくてはならない。沖縄の特徴を理解するために、多様な時代・社会のコンテクストを考えてみよう。

#### 1) 短い変化時期—戦後の約 20 年間—

沖縄では、風葬（複葬）から火葬へと変化したあり様は、日本の他地域の多くに認められる近代以降の緩やかな変化ではなく、戦後の 1950 年代から 1970 年代の約 20 年間に急激に広がり火葬が定着した特徴がある。

その時間は、短期間に圧倒的なく死者の在る戦時中・直後の社会の経験を経て、米国統治下で基地建設が本格化した時期の 1950 年代に始まる。それから 1972 年の＜日本復帰＞、その後の沖縄海洋博覧会が開催された時期と重なっている。この時期は、本格的な観光地・沖縄が整備された 20 年間とも重なっている。沖縄戦による多くの死者と対峙する経験や、その後の基地建設過程で墓地移転と移転地確保の問題は、＜死者の眠る＞空間変化も加速する要因の一つであろう。墓地移転を機に、墓に眠る遺体や改葬後の遺骨が火葬にふされた。

#### 2) 戦前からの改良運動の継続—女性たちの運動—

さらに沖縄の風葬から火葬への変化は、戦前の火葬場設置推進の流れから繋がる要因がある。戦前に展開された村政革新運動や戦後の生活改善運動によって火葬への移行が行われた点である。運動を支えたのは、伝統的な生活文化に対する＜変革＞への人々の希求でもある<sup>6</sup>。

女性たちと葬法の変化の関りをとらえた優れた先行研究に堀場清子「洗骨廃止の悲願」(『イナグヤナナバチー沖縄女性史を探る—』)、がある<sup>7</sup>。その中で沖縄本島大宜味村喜如嘉の洗骨廃止運動を通して戦後女性たち（婦人組織の運動展開）の葬送儀礼へのコンタクトを多角的に論じており、戦後展開された喜如嘉の「洗骨廃止」運動は、ある意味で戦後の女たちの価値を象徴してもいる。伝統的葬法＜洗骨＞に向き合う女性達が、「洗骨廃止」の直接的表現ではなく、沖縄では「火葬場設置運動」とより間接的に表現することを堀場は指摘する。ある意味では、ジェンダー・ポリティクスの構造批判を回避するこのあり様に、民俗信仰の変化問題の複雑さがある。

近代国家日本に組み込まれた 1879 年以降、沖縄の伝統的文化（遺骨への直接的コンタクト）が、衛生観念上から否定的に捉えられる風潮は少なくなかった。この日本とは異なる民俗信仰（葬法）の違いがベースとなって起る＜他者からの嘲笑的な＞評価への対応として、自らの生活文化や価値に＜改良＞を強いる意識が後押しする。

こうした戦前からの意識に加えて、戦後には農業改良普及事業の一環として農・漁村の生活の改善運動が展開されていく。戦後の米国の占領地沖縄で展開する＜衛生＞政策も関係は深いだが、紙面の制約上今回は指摘で止めることにする。

#### 3) 共同墓の変化—戦時下の死をめぐるポリティクス

さかのぼって戦時下で人々に儉約が求められた時期には、墓を新設する際、従来の門中

や親族で使用する共同墓は規制統制された。加えて地域による共同墓建設が推進され作られるようになった。この共同墓の性質の変化で女たちが行う〈洗骨〉は、近しい死者（親族）のみではない事態も起こる。つまり、それまでの各自に訪れていた〈死者〉と向き合う私的な問題（文化）が、公共的な役割を持つ意味を帯びるようになった。この時期展開された〈共同化〉は、地域（地縁）共同墓の推進だけではなく、様々な共同体制、共同作業、共同炊事、共同保育などの面でも捉えられる。

伝統的ともいえないこの状況に加えて、戦時下で死者が増加し、戦後の栄養失調・流行病など〈死〉は人々の暮らしの近くにあった。当然に女性たちが洗骨を施すタイムスパンが短くなる（「墓があふれて」という表現<sup>9</sup>）。暮らしの中で死が近くにありすぎるこの過酷な状況で、女たちは近親者や地域の人たちの洗骨を行うことになる。女たちに〈洗骨〉習慣に対する強い負の感情（嫌悪感）が広がることは無理もない。しかし、長く続いてきた民俗信仰の価値に「死者が焼かれる」ことを受入れがたい人々の根強い意識もある。その間で女達の意識も揺れ、そして葛藤と、強い〈否〉の感情。その感情の連続を転換できる事態は、全く新しい葬法（火葬）の導入でしか訪れない。火葬への移行を促す女性たちのエネルギーが高まっていく。

#### 4) 戦後のジェンダー・ポリティクス — 多様な女性たちの共有する価値へ —

こうした戦時下及び終戦間もない時期に死者の増加する状況に加え、戦後の人口バランスの不均衡も考慮しなければならない大きな要因である。沖縄戦直後の沖縄は、成年（20～50歳）人口比率が女性7：男性3と女性が圧倒的に多い社会である<sup>9</sup>。この男女の人口バランスの極端な非対称性は戦後沖縄の社会文化を理解する上で重要な意味を持っている。

つまり戦後沖縄の女たちの存在は、戦時中に生き残り、戦後を生き抜きながら、社会の営みや復興を支える中心的な担い手である。換言すれば戦争がもたらした多くの死（男性）は、戦前にも増してより強く伝統的な役割（洗骨をする）を女性たちに無言で強いることになる。加えて戦後復興や家族における働き手として、新しい経済的な労働力の担い手を強いる社会状況下のジェンダー・ポリティクスの構造がある。

しかも戦後沖縄社会には、戦前日本や台湾、朝鮮、満州、南洋などに移民していた様々な価値観を持ち生活し、戦後の引き揚げで地元に戻った女たちも少なくない。多様な価値観を持つ沖縄女性たちが、改めて互いに一つの伝統的な価値を固持する状況でもない。極端に言えば、従来の生活感情としての伝統的な共同感覚が共有できない、女たちのそれぞれの事情があったのである。

このような新しい局面で生きる戦後沖縄の女たちには、戦前の生活状況の葬法への価値観の違いを超えて、さらに都市や農村部での暮らしぶりを超えて、あらゆる女たちのジェンダー的平等の実践が必要となる。その選択の時期が、複葬から火葬へと変化する先述の20年間ともいえる。

このような戦中・戦後を通して何様にも生まれた女たちの状況は、戦前からの単的なく

改善>への価値と、戦後の<やむに止まれ>ず立ち上がる複数の価値との<共振>によって、<死>に関わる伝統的ジェンダー・ポリティクスの構図の停止を自ら選択したといえる。

#### 5) いくつかのコンテキストからの理解

この洗骨の担い手の<停止>を導いた主体は、政治的な活動では婦人団体活動のネットワークで展開された。この<洗骨廃止運動>は、当時の抑圧される人権問題（女性の権利拡大運動）や男女不平等などを議論の争点に主に語られ、重要な役割を果たしている。堀場が「悲願」と表現する、こうした団体に支えられた女性たちの根気強い運動を展開した活動も大きな要因になった戦後の洗骨廃止運動ではある。が、しかしこの一つの要因だけで文化は変革できるものでもない。上記に述べた、様々な社会・時代のあり様が作用しあいながら、女性が担った<洗骨>習慣は急速に消えていったのである。沖縄の人々が旧来の伝統的葬法と火葬とをどのように折り合いをつけてきたかの独自の在り様(変容と持続)は、幾重にも重なる時代状況とコンテキストからの多角的視点からの理解が必要であろう。

## おわりに — 葬法の自由の行方 —

1990年代からは、死をめぐる語りに<葬法の自由>が注目されて新たな傾向が登場する。今日では多様な実践が展開されて、自らの死を演出・決定する<終活>を考える動きも活発である。例えば、海や川や山に散骨する自然回帰法や遺骨を土中に直接埋葬し、墓標のかわりに目印として花木を植える樹木葬などである。この<葬法の自由>の実践を求める新しい流れの葬法いずれにしても、遺体の火葬化が前提にあることは注目すべきである。

約100%になった現在の沖縄の<死>をめぐる葬法の火葬。葬法である土・火・風・水の代表的な四葬での選択性は可能だろうか。例えば<自由>の中で<洗骨>は、選択可能かといえば、その実践は極めて難しい状況にある。現代の<葬法の自由>では、個人がどの様に遺骨の処理を望もうとも、「火葬が前提にある状況」からは自由ではない。

女性が<洗骨>の担い手であるという伝統的ジェンダー・ポリティクスの構図も無くなった現在、沖縄社会の男女が<死>をめぐる向き合う問題はどのようなものか。世界のトップクラスの火葬が実践されている現在の沖縄は、小さな島嶼社会という、環境は何も変わらず、それは未来も同じである。先述した「小さな島嶼社会の自然環境からすれば、古い時代において燃料エネルギー（木材など）の必要な火葬は、人々に積極的選択される葬法とも言い難い。」の意味を深く考え、少しの疑いの浮かばないかに見えるハイエネルギーが必要とされる火葬を前提とした現在の沖縄の<死>をめぐる文化について、これから死にゆく者たちは、環境の問題も含め命の終わりの不自由さの意味を深く考えてみることも必要かと思う。

- 1 『伊江朝睦日記』1810(嘉慶15)年10月13日に伊江親方の両親の洗骨が行われている。沖縄の各地より火葬普及が早かった那覇・首里地区でも近世期から昭和期まで洗骨が行われていた。
- 2 安謝葬祭場と同じ場所で、一部の人が利用していた(佐久田繁『沖縄の葬式』、名嘉真宜勝らが報告『沖縄・奄美の葬送・墓制』している)
- 3 1915年8月21日『琉球新報』、『那覇市史』(1968)収録。
- 4 沖縄県環境保健部編『衛生統計年報』各年を参考。火葬率に関しては、加藤正春(2010、詳細は註5参照)も参照。
- 5 奄美・沖縄の火葬文化については、堀場清子の先行研究と同様に加藤正春『奄美沖縄の火葬と墓制—変容と持続—』(榕樹書林、2010)の優れた研究がある。従来研究を踏まえ、多角的且つ詳細に論じられている。火葬や墓制に触れた既存の調査報告(民俗学、歴史学、考古学)や関連資料の情報(250件以上)を網羅して整理、分類・類型化を試みることで、単調でない地域各様を明示する。またその検討過程で、従来研究が「洗骨・銘書改葬習俗と崖墓や石造墓群研究に力点が置かれていた」こと、その研究動向が「火葬以前の葬送・墓制は洗骨改葬を伴った複葬制」と理解されて〈一般化〉され、近年の認識に繋がるとの指摘は注目に値する。更に従来研究で議論の少ない「一人用一次葬墓」を沖縄の墓で最も多い形状という独自の理解を提示している。〈死〉の様式の戦後庶民生活史でもある。
- 6 堀場清子『イナグヤナナバチ—沖縄女性史を探る』(ドメス出版、1990)の第1章「洗骨廃止の悲願」。その一部は『『イナグヤナナバチ……』—沖縄の葬制を変えた婦人会運動』『新沖縄文学』63・64号(1985年3月・6月)に掲載された。その他『習俗打破の女たち』(ドメス出版、1998)の「沖縄女性にとっての『近代』」でも〈洗骨廃止〉運動にふれている。
- 7 堀場は戦前の村政革新運動における社会主義思想を核とする男たちとその運動に呼応する女性たちの活動を、関係者の心情に寄り添いつつ喜如嘉の歴史文書を紐解く丹念な解説を行っている。同様に洗骨廃止運動について男たちの無関心をも鋭く指摘している。
- 8 宮里悦編『沖縄・女たちの戦後—焼土からの出発—』、『やんばる女一代記』
- 9 沖縄朝日新聞編『大観沖縄』650頁、日本通信社、1953年